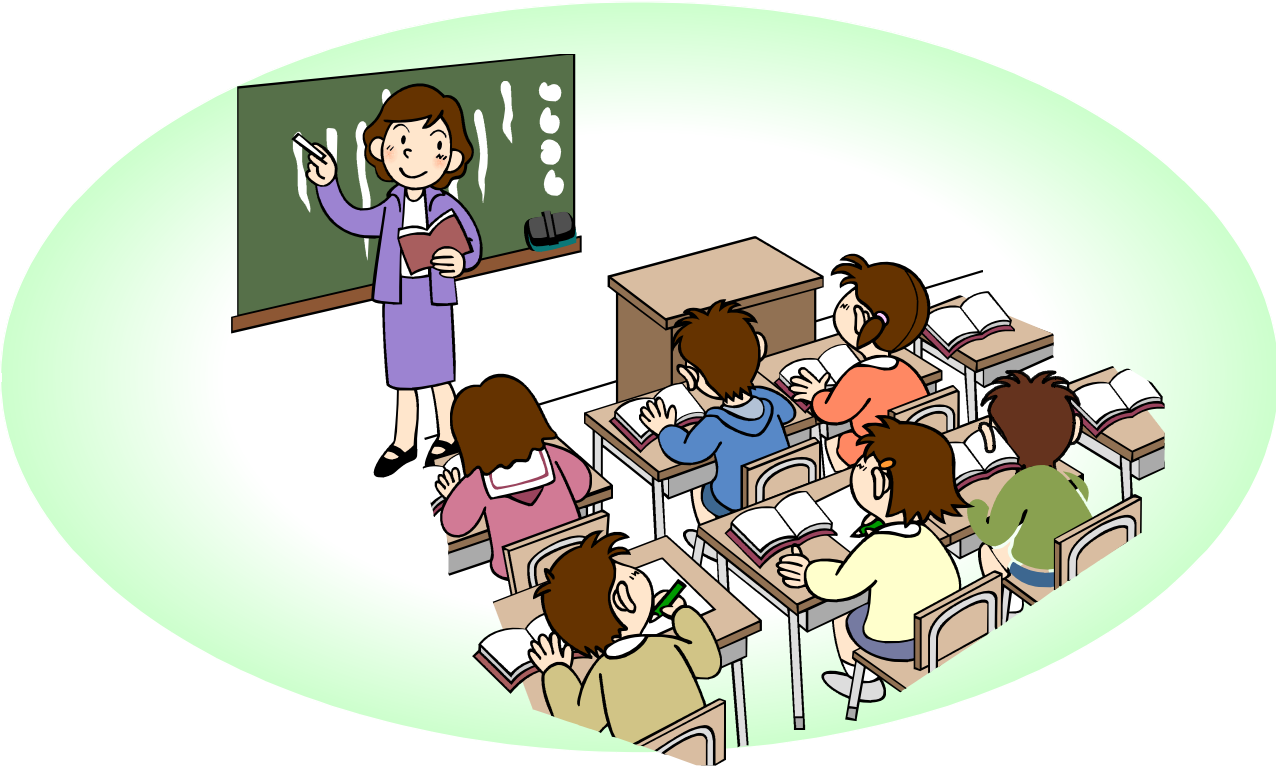
# 学級経営の 充実 に向けて



今日の子どもたちをめぐる状況をみると、学校外での体験の不足、いじめや不登校、家庭での過ごし方の変化、少子化による人間関係の希薄化等の問題が生じています。

**一方、学年・学級の人数や教師の経験年数等の違いにかかわらず、学級経営が困難になるような状態も生じています。**

このような場合、ある一つの原因だけでなく、複数の原因が複合的に絡み合っていることが考えられます。そのため、一つ一つ丁寧に時間をかけ、それらの原因に対処することが必要です。**また、学級経営が困難な状態にならないようにするために、日ごろからの見直しも大切です。**

そこで、学級経営を充実するために大切な７つのポイントをあげました。この点について、学校や学年全体で話し合い、学級経営の在り方を改めて考えてみましょう。

平成２２年１２月
群馬県教育委員会

# 学級経営の充実に向けてのポイント

## 1 子どもたちの実態把握に努めていますか？

少子化や都市化した地域社会等の影響で、子どもたちの家庭での生活スタイルは変わってきており、家庭で身に付けた生活習慣にも大きな違いが見られます。また、子どもたちの能力、適性、興味・関心等においてもそれぞれ違いが見られます。

そのため、学級には様々な子どもたちがいることをふまえ、一人一人の違いをとらえることが大切です。個に応じたきめ細かな指導ができるよう実態把握に努めましょう。

○子どもたちの実態把握は、「教師の観察」、「子どもとの面接」、「質問紙などによる客観的理解」を総合して行います。

・子どもとのふれあいを通して、表情や会話などから子どもの心の状態を把握しましょう。

・チャンス相談や個人面談など、子ども理解を深める機会を意図的・計画的につくりましょう。

・月一回行う「生活アンケート」や学級実態を把握する質問紙などを活用して、客観的なデータを集めましょう。

○極端に学業が不振であったり友達とのコミュニケーションがうまく図れなかったりする場合は、特別な配慮が必要です。複数の教員で様子をとらえましょう。

## 2 魅力ある学級づくりに努めていますか？

子どもたちが望ましく成長するように、学校経営の基本方針の下、学級の諸条件を整備していく必要があります。

その前提として、清潔で潤いのある空間としての教室環境を整えることは、子どもたちの情緒の安定のためにも重要です。

また、学級は共感的な人間関係をはぐくむ「心の居場所」でなくてはなりません。

一人一人が存在感をもち、集団を創り上げていく中でお互いの絆を深め、自己実現を図っていけるよう魅力ある学級づくりに努めましょう。

○学校の教育目標の基本方針に沿った学年目標や学級目標をたて、教職員が共通のめあてをもって、子どもたちが毎日生き生きと自己を高め、生活できるよう支援しましょう。

○一人一人の個性を尊重した受容的な学級の雰囲気づくりに努めましょう。また、子どもたちが互いに協力し合い、高め合える集団を育てましょう。

○子どもたちが、お互いの違いを認め合う雰囲気をつくることが大切です。一人一人の「よさ」を言葉にして本人や学級の友達に伝えましょう。

○学級は、生活の場であり、学習の場でもあります。学習成果や子どもたちのよさや思いを貼り出すなどの掲示物の工夫をしたり、授業を始める前に、ごみを拾う、机をそろえるなどの学習環境の整備をしたりして、教室環境を整えましょう。

# ③ よりよい人間関係づくりに努めていますか？

学級の人間関係の在り方は、子どもたちの健全な成長と深くかかわっています。他者を無視したり拒否したりするような人間関係の中では、いじめなどのゆがみが生まれることもあります。また、子どもたちは成長していく中で、様々な悩みや不安をもっています。

そのため、子どもたちとコミュニケーションをとり、人間関係の調整・改善を図ることが大切です。授業以外にも休み時間や放課後に一緒に遊ぶ機会、給食を食べながら話す機会などがあります。子どもたちとのふれあいを通して、よりよい人間関係づくりに努めましょう。

○学級がうまく機能する状態は、学級内の人間関係と学級内のルールの両方がバランスよく確立されていくことによって成り立ちます。ここでは、人間関係づくりについてふれます。

・行事や班別学習などの機会をとらえ、共同体験などを通した認め合い・支え合いを活動の中に意図的に仕組み、子どもたちの温かな心の交流を促進しましょう。

・集会や短学活などを活用して、構成的グループ・エンカウンターやグループワーク、対人関係ゲームなどを計画的に組み入れましょう。

・相手の気持ちやまわりの状況をうまくつかめない子どもには、場面や状況を脈略に沿って文章にしたり、その時の会話や気持ちを吹出しなどに書き込んだ簡単なイラストにしたりして伝えましょう。

・遊びなどで友達の輪にうまく入れない子どもには、教師が仲立ちをし、どんな言葉を掛ければよいか、どのように振る舞えばよいかなどの具体的な手本を示して、一緒に取り組ませましょう。

○人間関係づくりには、子どもたちの「自己有用感」を高めることが大切です。「感謝されてうれしかった」「みんなの役に立ててよかった」という気持ちをもてるように、意図的に活動を仕組んだり、教師が「みんな喜んでいたよ」「ありがとう」というような声かけをしたりして、学級の中にその子のよさを広げていきましょう。

【教師の指導の在り方と児童生徒が見せる学級状態】

教師が、どのような姿勢でどのように子どもたちとふれあっているかを自己点検することが必要です。

教師の言動が子どもたちのモデルになるよう心がけましょう。

ここで、教師のタイプをチェックしてみましょう！【参考：PM理論（三隅 1984）】

＜指導重視タイプ＞

学習指導も生活指導も徹底しているので、一見きちんとした学級に見えます。しかし、子どもにとっては、教師の指導一辺倒にがまんする学級生活になってしまいがちです。子どもたちはそのストレスから、友達へのいたずらやいじめ、さらには教師への反抗に発展することがあります。

＜援助重視タイプ＞

子どもたちは、個性や自主性を発揮する機会が多くなり、やる気が高くなります。先生には、受容する雰囲気があるので、温かな人間関係が生まれます。ただし、集団をまとめる技術が伴わないと学級のルールが確立されず、騒がしい学級になってしまいがちです。

＜指導と援助のバランス重視タイプ＞

学級は、「勉強と遊びのけじめのある生活」になるでしょう。教師がモデルとなり、子どもたちが互いに学び合う学級風土が築かれます。指導的側面ばかりで対応してしまう子が固定化しないように、子どもたちの多様な面を認めることが必要です。

# 4 規範意識を高める指導をしていますか？

学級では、基本的な生活のルールにかかわる指導の場面が様々に起こりえます。わがままな行為や友達との衝突、規則に反する行動、他者を拒否するような言動が見られる場合もあります。

そのため、日常の問題行動には十分に注意を向け、もしそうした場面が見られた時は、発達段階をふまえて毅然と指導し、行為の意味やそれがもたらす結果、責任などをしっかり理解させることが大切です。

こうした指導は、子どもたち一人一人に対する温かな態度や教育的愛情を前提としたものです。温かく粘り強く規範意識を高める指導に努めましょう。

○規範意識の醸成は、教職員と子どもたちの間の信頼関係を通して行うことが大切です。共通の目的に向かって指導方針に「ぶれ」が生じることがないようにし、継続的な指導が日常的なあらゆる活動の中で実施されるようにすることが必要です。

○「見守り」や「受容」の姿勢をもちつつも、間違っていることは間違っていると指摘し、バランスを重視しながら粘り強く指導することが大切です。そのような指導の積み重ねが規範意識の内面化につながります。

○学級がうまく機能する状態は、学級内の人間関係と学級内のルールの両方がバランスよく確立されていくことによって成り立ちます。ここでは、学級内のルールづくりについてふれます。

・ルールやマナーの意義について考える場面を増やしましょう。

・互いが気持ちよく生活するための学級のルールについて、定期的にその状況を子どもたちと確認し合いましょう。

・ルールを守れない子どもたちには、個別な支援や身に付けるためのトレーニングの場が必要です。

・ルールを守れない子どもたちを指導するばかりでなく、学級や生活のルールを守れている子どもたちをしっかりと認めましょう。その子どもたちが他の子どものモデルとなります。

・学級内のルールがなかなか覚えられなかったり意識できなかったりする子どもたちもいます。ルールを明文化し教室の壁などに貼ったり、掲示の仕方を工夫したりしましょう。

○基本的生活習慣の確立は、子どもたちの自主性や自律性、規範意識をはぐくむために必要不可欠です。発達段階に応じた支援・指導を展開するためには、家庭との丁寧なやりとりと協力が必要になります。家庭と連携して子どものよいところを認め、気になるところを一緒に考えていく姿勢で支援を進めましょう。

○家に帰るとテレビゲームや携帯電話、インターネットなどに夢中になり、時間を忘れて夜遅くまで起きている子どもたちが増えています。けじめのある生活を送るうえでも、保護者と連携し、家庭でのルールづくりに取り組めるように支援しましょう。

【子どもをほめる・叱る】

どの子どももほめてもらいたい、認めてもらいたいという思いをもっています。子どもたちのよいところに目を向け、できたその時を逃さず、子どもの目を見てしっかり向き合って心からほめてあげましょう。ほめるかかわりが基本ですが、叱る時は感情に任せたり、大勢の目前で叱ったりするのではなく、目立たないところでその子の自尊心やプライドを傷つけないようにすることが大切です。また過去のことをもち出したり、人間性を否定したりするのではなく、問題の行いのみを指摘しましょう。注意や叱責の結果、子どもたちが自分の考え方や問題に気付き、自らそれを改めようという方向に向かえるようにすることが大切です。

# 5 分かる授業、楽しい授業を展開していますか？

分かる喜びや学ぶ意義を実感することができない授業は、子どもたちにとって苦痛です。学校生活への意欲の低下や情緒の不安定をもたらし、様々な問題行動を生じさせることもあります。

また、子どもたちの中には、理解するまでに時間がかかり、言葉や文で表現することが苦手な子どももいます。

個別指導やきめ細かな指導を工夫したり、子どもたちが主体的に活躍できる場面を設定したりして、分かる授業、楽しい授業の展開に努めましょう。

## 『授業改善のポイントと１２の提言』

### ポイント１　学習内容の確実な定着を図る

提言１　つまずきに応じた支援策を明確に！

提言２　実感を伴った理解を促す！

提言３　間違いに気付き、疑問点を解決する機会の工夫を！

### ポイント２　学ぶ意欲の向上を図る

提言４　魅力ある教材の工夫を！

提言５　解決に向けた見通しをもたせる！

提言６　外部人材の効果的な活用を！

### ポイント３　思考力・表現力の向上を図る

提言７　考えを深める活動の充実を！

提言８　多様な表現方法を具体的に教える！

提言９　言語環境を整える！

提言10　総合的な学習の時間の充実を！

### ポイント４　異校種の学校や家庭との連携を図る

提言11　小・中学校の連携の充実を！

提言12　家庭での過ごし方の改善を！

「意識調査の結果から見えた
授業を変える１２の提言」
（平成２１年３月群馬県教育委員会）より

**【授業の視点と支援】**

○生徒指導の３つの機能を重視した授業づくりに努めましょう。

・「自己存在感」を与えましょう。
　→ 発言や頑張り、子どものよさを多面的に認める。目立たない子の意見もとり上げる。等

・「自己決定」の場を用意しましょう。
　→ 自力で考えたり活動したりする場を設定する。
　　時間を設定して一つのことをやり切らせる。等

・「共感的関係」を基盤とした授業を展開しましょう。
　→ 温かい言葉がけを用いて、子ども同士で認め合う。
　　場面を設定する。等

○子どもたちは、聞く力、見る力、話す力、書く力、見通す力などが個々に違います。一人一人が持てる力を発揮して「やった」「できた」という充実感や満足感を得られるように、一斉授業の中でちょっとした工夫に心がけましょう。

**学習（教室）環境の整備**
・教室内を整理整頓する
・掲示物を精選する
・座席を配慮する

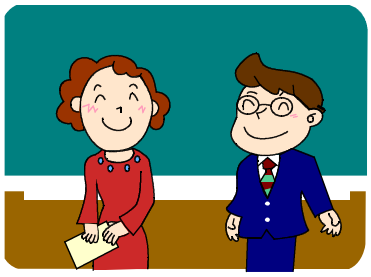
**指示や発問の工夫**
・具体的に短く、はっきりと話す
・注意を引きつけてから話す
・絵やカードなどで視覚的に示す

ちょっとしたきめ細やかな支援を心がける

**書くときの工夫**
・板書は必要なことだけに絞る
・色を変えたり囲んだりする
・やることや活動の手順を書く

**教材・教具の工夫**
・具体的な教材を用意する
・興味を引き出す教材を用意する
・ICT機器を活用する

## ⑥ 開かれた学級づくりに努めていますか？



学級担任が生徒指導において担う役割は、とても大きなものです。しかし、責任を強く考えるあまり、自分だけで抱え込もうとしたり、いわゆる学級王国的な考えに陥ったりすることがあってはなりません。

学年教員や生徒指導担当など、他の教職員と連携しながら進めることが大切です。また、小１プロブレムや中１ギャップなどには、校種を超えた連携が必要です。担任は、開かれた心をもって学級づくりに努めましょう。

○「校内の子どもたちには全教職員でかかわり、指導していく」という意識をもって、学校全体で子どもたちとかかわっていくことで、校内指導体制がより一層機能することとなります。
○スクールカウンセラーなども含め、組織で各担任の学級経営をサポートする仕組みをつくりましょう。
○日ごろから、子どもや学級の様子を話題にしたり、学年会や校内研修等で、学級の状態についての情報交換をしたりするなどして、お互いにアドバイスをし合いましょう。
○小学校の低学年段階と幼稚園・保育所、高学年段階と中学校とが連携を図り、合同行事や職員の交流、子どもたちの情報交換や引継ぎを行い、校種を超えて継続した支援を行いましょう。

## ⑦ 保護者との連携・協力に努めていますか？

充実した学級経営を行うには、家庭との信頼関係が欠かせません。そのため、保護者の学校への理解が深まるように、学級での子どもの様子や学校の情報を積極的に発信することが大切です。また、家庭環境の違いについても理解を深め、円滑な交流を通して保護者との連携・協力に努めましょう。

○保護者の学校に対する要望に耳を傾け、保護者が抱えている不安や悩みを受けとめて、共に解決するための支援を行う体制を整えることが大切です。保護者との日ごろの信頼関係づくりに心がけましょう。
○問題が起きたときだけ家庭と連絡を取り合うのではなく、普段から学校での生活の様子やよい姿を学級ＰＴＡの懇談会や学級通信などで積極的に発信したり、電話などで伝えたりしましょう。何か起きたときにはすみやかに家庭訪問をして、直接会って話をすることも大切です。
○学校で問題になっている子どもたちの姿の解決策を保護者に求めるのではなく、「学校でこんなふうに指導したら少しうまくいきましたよ」という具体的な手だてを示し、家庭でも取り組んでもらえるようにしましょう。
○入学時のオリエンテーションや学級懇談会で、子どもや保護者に自校の教育目標や生徒指導の方針を説明し、学校と家庭が共通した指導方針をもって、連携して子どもとかかわりましょう。

# 担任として学級経営を見直すチェックリスト

日ごろから、学級の物的・人的環境を整備することは、子どもたちの心を豊かにし、温かい人間関係を築くことにつながります。また、すべての子どもたちが学級を「心の居場所」として、充実した学校生活を送れるように、学級担任と子どもたちをサポートする組織体制も求められています。

学級がうまく機能しない状況は、ある一つの原因だけでなく、複数の原因が複合的に絡み合っていることが考えられます。

**【子どもの実態把握】**

- □ 子どもとのふれあいを通して、表情や会話などから、子どもの心の状態を把握している。
- □ 子どもの話をじっくりと聞く機会を設けている。
- □ 「生活アンケート」や学級実態を把握する質問紙などの結果を、児童生徒理解と指導に生かしている。
- □ 複数の教員で児童生徒理解につながる情報を伝え合っている。

**【学級づくり】**

- □ 学校の教育目標の基本方針に沿った共通のめあてをもって、子どもたちを支援している。
- □ 学級には一人一人の個性を尊重し、互いを認め合う雰囲気がある。
- □ 一人一人のよさを言葉にして、本人や学級に伝えている。
- □ 掲示物の工夫をしたり、授業前の環境整備を習慣付けたりしている。

**【人間関係づくり】**

- □ 共同体験を通した認め合い・支え合いを、活動の中に意図的に仕組み、交流を促進している。
- □ 集団体験による心のふれあいや分かち合いを教育課程に計画的に組み入れている。
- □ 相手の気持ちや状況をうまくつかめない子どもには、適切な支援をしている。
- □ 友達とうまくかかわれない子どもには、教師が仲立ちをしたり、手本を示したりしている。
- □ 子どものよさを引き出す活動の工夫やよさを学級に広げる声かけなどをしている。

**【規範意識】**

- □ 学校生活のルールについて共通理解を図り、指導方針に「ぶれ」が生じないようにしている。
- □ 規範意識の醸成には、「指導」と「見守り」のバランスをとりながら粘り強く指導している。
- □ 様々な場面で、その都度ルールやマナーの意義について考えさせている。
- □ ルールを守れない子どもを指導するばかりでなく、守れている子をしっかりと認めている。
- □ 発達段階に応じた指導を展開するために、家庭と丁寧なやりとりをしている。

**【分かる授業・楽しい授業】**

- □ 賞賛やうなずきで発言を受容的に受け止め、よさや頑張りを多面的に認めている。
- □ 指導過程の中に、自力解決や集団解決の場を位置付けている。
- □ 子どもたちの学び合いを支える共感的関係が授業の基盤にある。
- □ 子どもたちのつまずきを予想し、支援の方法を明確にして授業に臨んでいる。
- □ 子どもたちが主体的に活動したり体験したりできる授業展開を工夫している。
- □ 具体物や視覚的な資料など、ちょっとしたきめ細やかな支援をしている。

**【開かれた学級づくり】**

- □ 学年会や他の会議で、子どもの様子などについて情報交換できる場が確保されている。
- □ 組織で各担任の学級経営をサポートする体制がある。
- □ 異校種間の合同行事や職員の交流、子どもたちの情報交換や引継ぎをしている。
- □ スクールカウンセラーなど、専門的な知識や技能をもった外部の人材を積極的に活用している。

**【保護者との連携】**

- □ 保護者が抱えている思いや不安、悩みを受け止めている。
- □ 学級通信や懇談会などで、学年・学級の取組の様子を積極的に発信している。
- □ 解決策を家庭に求めるのではなく、具体的な手だてを示すなどして共に考えている。
- □ 電話連絡だけでなく、保護者と直接会って話をするなど、家庭との密な連携をしている。